

論 文 要 旨

申請者氏名 畢 文涛

申請学位 博士（言語教育学）

主論文題目

日本語における「ほめ」表現に関する通時的研究

主論文要旨（邦文は4,000字以内
外国語は2,000語以内）

第1章 序論

本章では、研究の背景と目的について論じる。

「ほめ」は円滑な人間関係を構築、維持する言葉として、さまざまな場面で用いられる。「ほめ」は、あらゆる言語の中に存在している重要な社会言語現象であり、感謝、謝罪、依頼表現などと同じように日常生活の中で、頻繁に使われている言語表現の一つである。本稿では、古代から近現代までの日本語における「ほめ」表現について、分析・考察する。その分析・考察を通じて、「ほめ」表現の様相を通時的に明らかにすることを目的とする。

第2章 先行研究

本章では、まず、「ほめ」についての先行研究をまとめる。「ほめ」の定義、分類、機能、ポライトネスに関する先行研究をまとめ、先行研究から見た課題について述べる。

「ほめ」に関する先行研究により、現代語における「ほめ」の対象、表現、機能、人間関係、返答に見られる日本語的ストラテジーなどがかなり明らかにされているが、現代語以外のものについては、あまり研究が行われていない。そこで、本稿では、古代から近現代までの日本語における「ほめ」について、その表現形式、人間関係、対象、返答について、考察する。

第3章 「ほめ」に関する調査の概要

本章では、調査の目的、対象、方法について論じる。

本稿では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品を資料に、その中に現れる「ほめ」表現をデータとする。時代を①古代、②中世、③近世、④近現代の四つに分類し、「とほめ」、「と褒め」、「と誉め」、「ほめ」、「褒め」、「誉め」、「称め」、「賞め」などで全文検索し、用例を抽出する。これらの文学作品中に使われている「ほめ」表現は、当時の「ほめ」の使用状況を反映していると考えられる。

第4章 「ほめ」に関する調査の結果

本章では、各時代（古代（奈良時代、平安時代）、中世（鎌倉時代、室町時代）、近世（江戸時代）、近現代（明治時代、大正時代、昭和時代））の用例について、調査結果の概要を述べる。

両資料から収集した「ほめ」表現の用例の総数は731である。『新編日本古典文学全集』から361の用例が、『青空文庫』から370の用例が採取された。

第5章 「ほめ」に関する考察

本章では、収集した「ほめ」の用例について、表現、人間関係、対象、返答の四つの面から分析を行う。そのそれぞれについて、具体的な内容を分析し、考察を行う。

5.1 「ほめ」の表現

本節では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品の中でどのような表現を用いてほめが行われているかを分析する。金（2012）の分類を借り、「ほめ」の表現形式を①肯定的評価語のみ使用、②肯定的評価語の使用+他の情報、③肯定的評価語の不使用の三つに分類する。分析の結果については、以下の通りである。

「肯定的評価語」を用いることで「ほめ」を行う場合が多い。

時代別、男女別に見ると、「肯定的評価語のみ使用」については、古代と中世においては、男性が女性より割合が高く、近世と近現代においては、女性が男性より割合が若干高い。また、「肯定的評価語の使用+他の情報」については、古代、中世、近世においては、女性が男性より割合が高く、近現代においては、男性が女性より割合が高い。そして、「肯定的評価語の不使用」については、古代、中世、近世ともに用例が少なく、古い時代には評価語を使用しないものは、「ほめ」とは認められていなかったとも考えられる。ただし、わずかではあるが、各時代の用例に、肯定的評価語を使用せず、間接的・暗示的にほめる表現が様々な形で現れている。近現代においては、用例が多く、女性が男性より割合が高い。

5.2 「ほめ」の人間関係

本節では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品の「ほめ」表現における人間関係を分析する。古川（2003）の対人関係の分類標準に従い、人間関係（上下、対等、下上）と、男女の性差を分析の視点とし、分析を行う。分析の結果については、以下の通りである。

上下「ほめ」が行われる場合が多いが、下上「ほめ」も多く見られる。対等「ほめ」は、上下「ほめ」、下上「ほめ」と比べると、使用が少ない。時代別に見ると、上下「ほめ」については、古代から近現代まで、男性がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多い。また、中世と近現代においては、同性間の「ほめ」がやや多い。対等「ほめ」については、古代においては、男女に差が見られないが、中世においては、用例が1例しかなく、確かなことは何も言えない。近世、近現代においては、男性がほめることが多く、女性がほめられることが多い。下上「ほめ」については、古代と近現代では、女性がほめることが多く、男性がほめられることが多い。一方、中世と近世では、男女に差がほとんど見られない。また、近現代では、同性間の「ほめ」がやや多い。

5.3 「ほめ」の対象

本節では、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』の作品の「ほめ」表現において、何についてほめが行われるかを分析する。Holmes(1988)、丸山(1996)、古川(2003)、大野(2003)、金(2012)の先行研究に基づき、「ほめ」の対象を①所持物、②外見、③能力、④性格・人柄、⑤行動・態度、⑥状態の六つに分類することにする。分析の結果については、以下の通りである。

ほめ手の性別に関わらず、「能力」について「ほめ」を行う場合が多い。

「①所持物」については、いずれの時代でも、「③能力」、「⑤行動・態度」に次いで高い割合で現れた。男女差を見ると、古代と近世において、男性のほうが女性よりほめ手になる割合が高い。一方、中世と近現代においては、女性のほうが男性よりほめ手になる割合がやや高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、中世以外においては、「評価語の不使用」が「評価語の使用」の割合より高い。

「②外見」については、全体として、比較的割合が低い。男女差を見ると、古代と中世においては、女性のほうが男性よりほめ手になる割合が高い。一方、近世と近現代においては、男性のほうが女性よりほめ手になる割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、古代と中世はすべての用例が「評価語の使用」となるが、そのうちには「評価語のみ使用」のほかに、「評価語+他の情報」の使用も見られる。一方、近世と近現代では、「評価語の使用」のほかに、「評価語の不使用」も現れている。

「③能力」は、全体として、最も高い割合で現れている。男女差を見ると、古代と近現代においては、男性のほうが女性よりほめ手になる割合が高い。一方、中世と近世においては、女性のほうが男性よりほめ手になる割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、いずれの時代においても、「評価語の使用」の頻度が「評価語の不使用」より高い。そして、中世以外においては、「評価語+他の情報」の割合が「評価語のみ使用」より高い。

「④性格・人柄」については、全体として、割合が低いものの、「外見」、「状態」より例数が多い。男女差を見ると、中世以外において、女性のほうが男性よりほめ手になる割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、すべての時代で「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そして、中世以外においては、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。

「⑤行動・態度」については、全体として、「能力」の次に高い割合で現れている。男女差を見ると、古代以外において、男性のほうが女性よりほめ手になる割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、古代以外において、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。そして、近世以外において、「評価語+他の情報」の割合が「評価語のみ使用」より高い。

「⑥状態」については、全体として、最も割合が低い。男女差を見ると、古代以外において、男性のほうが女性よりほめ手になる割合が高い。また、ほめの対象と表現との関連を見ると、古代と近代において、「評価語の使用」の割合が「評価語の不使用」より高い。一方、中世と近現代においては、「評価語の不使用」の割合が「評価語の使用」より高い。そして、古代と中世では、「評価語のみ使用」の割合が「評価語+他の情報」より高い。一方、近世と近現代においては、「評価語+他の情報」の割合が「評価語のみ使用」より高い。

以上から、次のことがいえる。「外見」、「能力」、「性格・人柄」、「行動・態度」、「状態」については、「評価語の使用」が多いが、「所有物」については、「評価語の不使用」が多い。また、「行動・態度」、「状態」については、特に近現代において、「評価語+他の情報」の使用が多い。

5.4 「ほめ」の返答

本節では、『新編日本古典文学全集』『青空文庫』の作品における「ほめ」の返答について分析する。横田（1985）の分類を借り、「ほめ」表現に対する返答を「A肯定的返答」、「B否定的返答」、と「C回避的返答」の三つに分類することにする。分析の結果については、以下の通りである。

ほめ手の社会地位に関わらず、「B否定的返答」を用いることで「ほめ」を行う場合が多い。一方、「C回避的返答」はどの時代でも少ない。

第6章 結論

本章では、本稿の調査の結果・分析・考察についてまとめる。さらに、残された課題について述べる。